

照葉樹林文化の一要素としてのニホンミツバチの養蜂 —対馬のハチドウとハチドウガミを事例として—

山口 裕文

壱岐とともに神々の島として知られる長崎県対馬はニホンミツバチの伝統的養蜂が営まれていることで有名な場所であり、ハチドウと呼ばれる巣箱（飼養洞）の乱立は対馬の原風景を作っている。ハチドウとその民俗に関する報告は多く（杉本，1989；大坪，1990；吉田，1990；宅野，1994），多様なハチドウとミツバチと人との関わりが知られている。ソバの花のしぼむ頃とられる蜂蜜は，対馬では豊穡を禱る秋の奉りにまず「だんつけ餅」や「蜜もち」として楽しまれる（月川ら，1985）。また，ハチドウ自体をご神体として奉る例もある。対馬における景観の要素としてのハチドウや年中行事に関わる蜂蜜の利用は，ミツバチと人間の関わりを写した文化要素と捉えることもできる。

生業として重要な技術や道具が文明化という機能や効率の追究によってきわめて速く変容し易いのに対して，生活の周辺をとりまく副次的要素には変容が遅く伝統的文化という形で残り続けるものがある。ニホンミツバチの養蜂では古来から「方円を嫌わぬ」巣箱の利用が知られ（家畜養蜂記や日本山海図絵など），江戸時代中～末期の砂糖や木蠟の普及（小今井・足立，1990；岡，1989）とその後のセイヨウミツバチとその近代的効率的な養蜂技術の導入にも関わらず，それらは，日本各地に残っている（岡田，1997；佐々木，1994；澤田，1986）。伝統養蜂による蜂蜜のおおよそが大きな流通とはなっていないことから，この伝統の維持は機能や効率という視点からではなく，別の視点から捉えてみる必要があろう。本稿では，対馬を中心として観察したニホンミツバチの巣箱の多様性を照葉樹林帯の攪乱環境下での文化要素という視点

から考えてみたい。

調査場所と方法

対馬の自然の背景はこれまでの報告（杉本，1989；大坪，1990；吉田，1990；宅野，1994）に述べてあるので，ここでは，これまでの記述から漏れている重要な点を補足しておきたい。山地の多い対馬は，平地がすくないため，小さな河川の川口にある低湿田を除くと，水田は無く，人家の周囲には畠が多い。そのため林業と漁業への依存度が高い。農産物では畑作物が主流を占め，これは江戸時代から続いたものであり（陶山，1722），戦後間もなくまで，オオムギ，ソバ，ダイズ，アズキ，サツマイモなどが栽培されている。とくに，山地での計画造林が進む前にはコバと呼ばれる焼畑が各所で営まれ蜜源となる雑木が豊富であった。この焼畑で作られる対馬のソバは，現在の畑作でも同じだが，秋ソバの作型で作られ（氏原・俣野，1978），採蜜時と冬越しの直前の重要な蜜源としてニホンミツバチへ大量の花を提供していたと推定される。対馬の山は信仰対象として人の入っていない龍良山や白岳などにあるわずかな照葉樹林の極相林を除くと，スギやヒノキの針葉樹の人工林となっており，島の西部に多い自然林は，かつての焼畑から回復したあるいはシイタケのほだ木生産のためのコナラを主とする二次林である。また，対馬では1700年頃に鹿と猪のせん滅作戦が展開され（陶山，1700），現在も鹿の生息は僅かであり，猪は一頭もいない。

対馬に伝統的なミツバチの飼養があるのは1970年ころから確認していたが，具体的な調

査は、1996年に日本生命財団よりの助成研究「照葉樹林における伝統的農村のもつ環境保全機能—中尾佐助資料を活用して—」をすすめるのに伴い開始した。対馬では1996年8月に予備調査を行った後、1997年5月および8月に対馬の十数ヶ所において、ミツバチの巣箱を観察し、それぞれのサイズを計測し、記録写真を撮影した。また、対馬内の佐賀、三根、舟志、女連などでは適宜、飼養者への聞き取りを行った。巣門の数や雨よけの状況など巣箱とそれに付随する要素については記録写真からデータをとった。1998年4月には補足的な聞き取りと巣箱の分布を観察した。同一地点にある前年と同じ巣箱は、1個と計算し、確認できた巣箱の形状を集落毎にまとめた。

また、九州山地（宮崎県西米良村および椎葉村、熊本県五木村および東陽町）と和歌山県南部（串本町および古座町）を対照地として伝統養蜂を調べた。この地域は、対馬と同じように古くは焼畑が営まれた山林業地帯であるが、猪や鹿などの生息数が顕著に多く、最近では鹿や猪が農作物を荒らすほど増えている。宮崎県と熊本県の山間部では1996年10月と1997年6月に対馬と同様の調査を行った。和歌山県紀伊半島南部の事例については、京都大学亜熱帯植物実験所の梅本信也先生より計測値を提供頂いた。



図1 対馬に普通にみられる円筒形（後）と箱形（前）のハチドウ前は2本の、後ろは3本の溝を持つ巣門がある。巣門は対馬固有？

多様な対馬のハチドウ

対馬のハチドウ（蜂洞）は外観に於いて多様である。主に見られるのは、円筒形で基部がやや膨れたものが多い。ハチドウには箱形のものや重箱状のものもあるが（両者を併せて以下ハコドウと呼ぶ）、卓越してみられるハチドウは円筒形のもの（岡田（1997）のいう丸木巣箱にあたるが、ここでは杉本（1989）に従って以下マルドウとする）である。ハチドウはニホンミツバチを飼養するための閉鎖空間であり、マルドウは、通常、杉をくり抜いた筒の上部に蓋を着け、ミツバチの出入口（巣門）である穴や溝を下部に備えている（図1）。巣門は、ハチドウの一方の面に作られ、ハコドウでも出入口は一つの面에만配置される。ハチドウの基本的な構造は杉本（1989）に、設置場所の詳細は宅野（1994）などに記述がある。製作資材にはマルドウでは金属は殆ど用いられず、ハコドウでは金釘が用いられている。マルドウでは時折割裂防止のために又釘が打たれたり、針金で縛られている。ハチドウの表面は、マルドウでは樹皮をつけたままあるいは剥いだ状態で、通常は無塗装、まれに防腐剤で塗装される。ハコドウでは杉板の表面は無加工で粗く、防腐剤を塗装する例が多い。ハコドウでは時として鉋がけされた板が使われたり、青いペンキで塗装されたりする。



図2 縦穴をもつハチドウ（上対馬町舟志）上部に乗っているのは通常の大きさのハチドウ

表1 ハチドウの巣門における溝または孔の分布

巣箱の形	溝または孔の数						計
	無し (0)	2	3	4	5~10	25	
マルドウ	1	22	55	2	6	0	86
ハコドウ	1	5	20	10	2	2	40
計	2	27	75	12	8	2	126

ミツバチの出入口である巣門には溝や孔が彫られ、マルドウでは雨よけ状のへこみの中やその上部に彫られ、ハコドウでは溝や孔の上部または上部と両側に雨よけ状の棧が着けられる場合が多い。孔や溝は稀に無いこともあるが、その数は、マルドウでは2個から9個、ハコドウでは2個から25個である(表1)。マルドウでは3個がもっとも多く、次いで2個、ハコドウでは3個が最も多く、次いで4個である。この違いは統計的に有意である。孔や溝には杉本(1989)も記述したように、さまざまな変形があり、溝の先端にのみ小孔をもつものから、溝全面が空隙となる場合、およびそれらの移行型がある。孔や縦に刻まれた溝は通常水平に配置されるが、舟志の例では孔は縦に配置されていた(図2)。これは素材の丸木にもともと有った縦穴に棧を差し込み段々状に巣門を作ったものである。ミツバチの出入口の機能を補助するものに金網があり、これは、スズメバチ(ほとんどキロスズメバチ)の侵入を防ぐ目的でおもにスズメバチの多い晩夏から秋に着けられ、ハコドウでもマルドウでもみられる。

ハチドウには上部に雨よけとおさえ(重石)があり、下部に台座がある。それらの素材は杉本(1989)が述べたのと同じである。おさえについてみるとコンクリートブロックと岩石が多いが、ブロックの利用は、ハコドウの利用地域に多く、自然石はマルドウの優占地域に多い。とくに島の西側では対馬で古くから「石屋根」の屋根素材に使われている頁岩の利用が多い。重石の形状についてハコドウとマルドウの間に差はみられない。台座には、コンクリート板の利用が多いが、人家の近くではブロックの例が多くなり、マルドウの卓越地域とくに島の西部では自然石が多い。また、プラスチック製のミカン箱やビールケースを台座の下に利用する例

もある(図1)。雨よけの板にはビニールやトタンの波板の利用が多いが、発泡スチロールのトロ箱やプラスチック製のたらいや収納ケースの利用もある。また、厳原町椎根ではハチドウ全体を小屋で囲った例もみられる。

マルドウでもハコドウでもハチドウにはさまざまな模様や文字が描かれたり彫られている。赤や黄色の線を回して描いたものや、文字や数字が描かれている例が多い。これは、所有者を示す意図が強いようであり、対馬で屋号に使われるシルシ(矢野, 1995)を刻んだものも少なくない。

マルドウとハコドウは、島の全体にどこにでもみられるが、分布を調べると、美津島町根緒から空港周辺までの間の国道沿いおよび箕形では一部を除いてハコドウが卓越し、厳原町では久田、阿連、内山周辺とつつ瀬で、美津島町では尾崎と賀谷付近で、上対馬町では琴付近でハコドウとマルドウが混在する(図3)。それに対して峰町や上県町では圧倒的にマルドウが多い。

明瞭ではないが自然物の利用は対馬の中で田舎の場所に多く、現代的資材の利用は都市的な場所に多いようにみえる。養蜂を目的として作られるハチドウの本体(マルドウとハコドウ)には都市的地域とそうでない地域とに差異があり、補助的素材の利用形態には単純に資材の入手の容易さに伴うばらつきがあると判断される。

三根のハチドウガミ

対馬の峰町は三根川の下流に開けた町である。三根川は大久保で二つに分かれ、本流はユクミの谷を北へ上り、支流の佐賀の内川は東へ上る。1996年10月25日、大久保からユクミ方面へ上がった三根川のほとりで山の神の奉りが営まれていた。男ばかり15,6名が浅い淵のもとで神主の祝詞を聞き、酒を飲み交わすほど

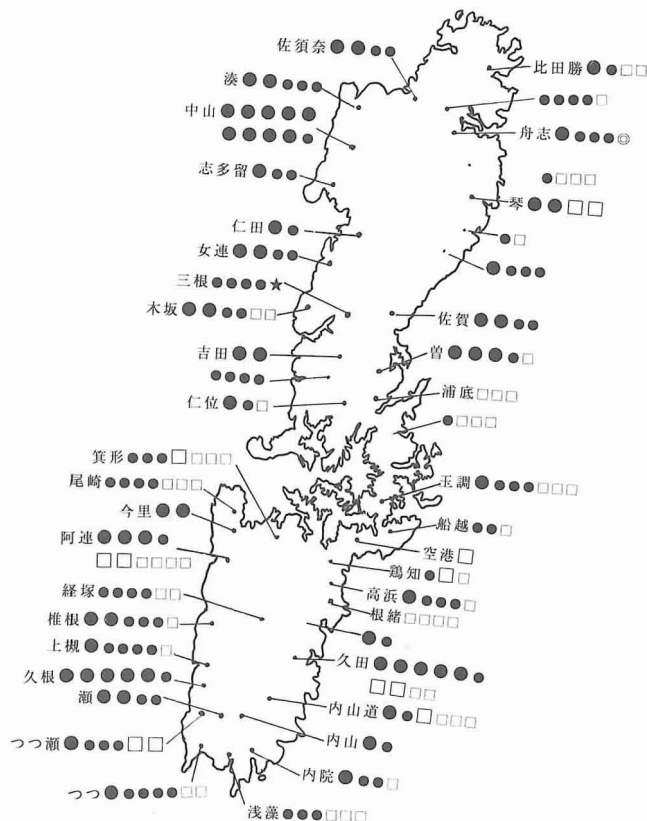


図3 マルドウとハコドウの分布

●：マルドウ，□：ハコドウ，◎：縦穴をもつ巨大なハチドウ，★：ハチドウガミ
大記号は5個，小記号は1個を示す ハコドウは都市的地区に多い

の質素な祭である。この後のささやかな宴の中で「三根や吉田にはハチドウが奉られている」との話を聞いたわれわれは、早速、土地の方の案内でその神社へ赴いた。神社は、三根中里の寺の内にあり、小牧（おひら）宿禰命を奉る小牧宿禰神社である（最近は「こまき」神社と呼ばれているが「玉かつま（本居，1793～1801）」によると小牧（ヲヒラ）宿禰神社で座王権現というとされる）。本殿に向かって左側に軍殿神社と右側に田口村神社の祠があり、右にはさらに小さな祠がある。この小さな祠がハチドウを奉ったハチドウガミである（図4）。注連縄がかけられたハチドウは、やや大ぶりで、石台に座し、上部には平石とゴムシートの雨よけがあり、通常ハチドウにみられる重石はない（図4）。材はケヤキで古びてはいない。平石はいわゆる対馬の石屋根に使われる頁岩である。調べ

ると、神社は10年前に建て替えられ、昔、奉ってあったハチドウガミを7年前に再現（建）したとのことである。このハチドウガミは、三根中江の小学校のエノキの木の洞に有ったものを大正6年に小牧宿禰神社の右側に鎮座させたという歴史をもつものである（図5）。大坪（1990）は、元禄年間の陶山訥庵の書に「養蜂は継体天皇のころ、太田宿禰が山林より巣をとって家園で飼育する法を村人に教えた。その味は濃厚で美味である。」とあると述べ、対馬での古来からの養蜂の存在を推定している。大正6年以前にハチドウガミがあったかどうかは判らないが、ご神体として神社に奉られる形で「養蜂」が信仰へと延長している点は、養蜂がいかに対馬の人の生活と一体化して存続してきたかを示すものとして注目される。話しに聞いた吉田のハチドウガミは、その後の調査でも確認で

きなかったが、対馬ではハチドウは古くから神として信仰の対象にあったものと推定される。

ハチドウのサイズ

多様なハチドウを構成する要素の全てについて考察はできないので、ここでは次に、その大きさについて検討してみたい(図6)。マルドウでもハコドウでもそのサイズは単純化すると高さと同径もしくは底辺の長さで表現できる。対馬で調査したハチドウと宮崎県および熊本県のハチウト(または単純にウト)と和歌山県のゴウラのサイズは、図6に示すとおりである。ハチウトとゴウラは、伝統養蜂の巣箱であり、いずれも円筒形である(和歌山には箱形の巣箱があるが、今回は計測していない)。対馬のマルドウとハコドウには横径に明らかな差があり、マルドウでは40cm前後、ハコドウでは30cm前後である。長さに大きな差はみられない。直径40cmの円の面積は約1260cm²、一辺30cmの正方形の面積は900cm²となるが、通常、マルドウではハコドウより材の厚さが厚いので、マルドウでの材の厚さを6cm、ハコドウでの材の厚さを2.5cmとすると両者が作る空間の平面領域は約600から620cm²となり、ほぼ等しくなる。一方、九州山地のハチウトと和歌山のゴウラでは、横径は対馬のマルドウとほぼ等しいが、長さは20cmほど短い。対馬ではマルドウでもハコドウでも明瞭な巣門を備えている。これに対して本州や四国九州の円筒形巣箱である



図4 小牧宿禰神社のハチドウガミ

(1998年4月11日撮影)

注連縄がしめなおされ、餅が供えられ、灯明が上げられている

ハチウトやゴウラには本来明瞭な巣門が無く、この形状は古くから変わっていない(澤田, 1986; 宮崎県, 1970; 肥後ら, 1991; 岡田, 1997)。ハチウトやゴウラでは巣門は、台座に接した円筒の基部を歯牙状もしくは平かまぼこ状に削ることによって作られている。対馬のハコドウやマルドウにはごく稀に明瞭な巣門のないものがあり、その高さはゴウラやハチウトと等しい。対馬のハチドウの巣門の最上位は下部から15cmや20cmの辺りにあるので、ハチドウの巣門以下の空間が切り取られたものが本州や九州の巣箱にあたり、異なった場所で使われているニホンミツバチの養蜂箱はある一定の閉鎖空間を確保していることになる。

大正六年六月十九日
 峰村大寺三根中江即子校下
 方所ノ蜂飼神ヲ日氏神
 様ニ移轉鎮座マシマス
 大正六年六月十九日
 三根氏子惣代
 本島松太郎
 三根氏子
 志波役
 阿部初太郎
 阿部初太郎
 阿部初太郎

図5 ハチドウガミの奉納の記録

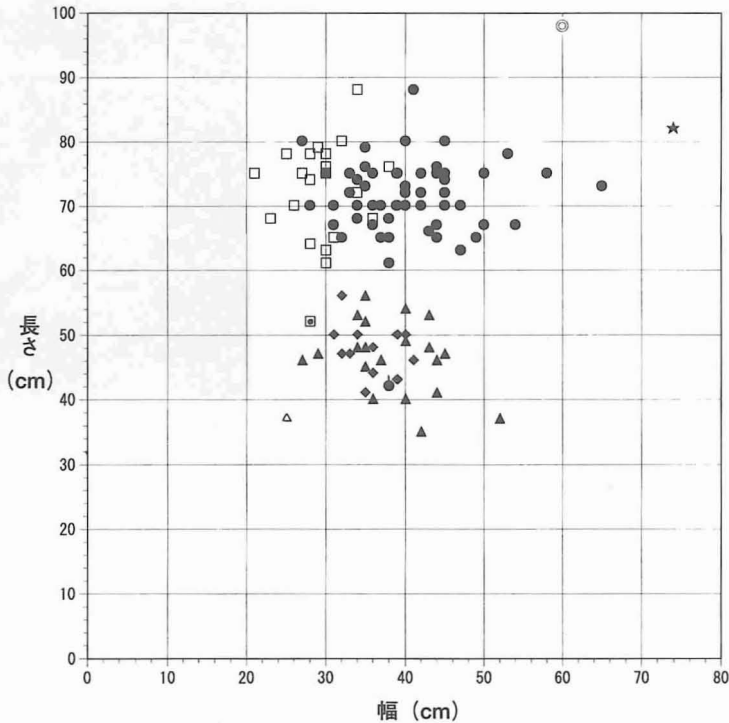


図6 ハチドウの形と大きさの関係

●：マルドウ，□：ハコドウ，◎：縦穴をもつ巨大なハチドウ，★：ハチドウガミ，▲：九州山地のハチウト，◇：和歌山県のゴウラ（円筒形のみ），□および●：無巢門のハコドウとマルドウ，△：西米良村狭上稲荷のハチウト。

巣箱の機能性

ニホンミツバチの養蜂箱がすでに江戸時代から多様であったのは良く知られており、日本山海図絵（寛政11年：1799）には家に養う蜂（畜家蜂）について、「家に畜わんと欲すれば先ず桶にても箱にても作り、（略）、箱なれば九寸四方堅式尺九寸にしてこれを堅に掛るなり。（略）松の古木を用い、是又鋸のみにて鉋にて削ることを忌む。（略）下の戸の上に一步八厘、横四寸斗の隙穴を開きて蜂の出入りの口とす。（以下略）」と記述され、「飼養箱は箱でも桶でも良く、その大きさは、九州地方では箱であれば約27cm四方で高さ87cmで、材は厚さ24mm、巢の出入口の隙間は5-6mm程度で横に12cmの長さ、鉋掛けにせず、表面は粗いままが良い」とされる。この内容には、酒樽の穴状の巢門や板組の桶の利用など熊野の山地での実態としては考えにくい側面もみられる（図絵）ものの、基本的記述は、家蜂蓄養記（寛政3年）

ともほぼ同じで、現在の対馬（あるいはニホンミツバチ（澤田，1986））の養蜂技術の基層が当時と変わっていないことを明瞭に示している。

現在の巣箱の多様性は、図6からわかるように、機能性を高め、効率を求める方向と機能性からのふれという概念によって捉えることができる。採蜜から次の採蜜までの一年間にミツバチが稼いで作る巢板の量には大きなばらつきを持つ平均的な値が期待されるので、採蜜とハチ群を維持するための機能的な空間を確保する巣箱の大きさはあるサイズに落ちつくと期待される。確保された空間では巢板が上部から垂れ下がった後、両側面に固定され、安定したたたずまいをつくる。対馬では通常、この上部の1/3から2/3の巢板を切り取るのが普通であるから、ミツバチの活動量と採蜜量とに合理的空間が期待されるのである。文明や科学技術の進展という側面からみると巣箱という「道具」には機能的な探求がすすむので、ハチドウでは材を軽くして、容易に工作し（杉本，1989）、出来る

だけ効率よく蜜を回収するという方向へ変化する力が働く。その面からみると、マルドウからハコドウへ、また、巢門の簡素化は一つの帰結ということになる。

一方、信仰対象となっている三根のハチドウガミの祠と舟志の縦穴をもつハチドウは機能的と考えられる平均的なサイズから離れる(図6)。このような例のひとつは、宮崎県西米良村の狭上の稲荷にある鉄砲神事につかわれる縦の木の下に備えてあるハチウトである(図7)。前者2つは、機能的空間を占めるよりはるかに大きく、後者は小さすぎる。後者についてはなぜこのハチウトがここに置かれているのか調査を完了していないが、これらには、明らかに巣箱もしくは集蜜道具としての機能性が欠落していると思われる。

養蜂にみる人と自然と文化と

これまでに述べてきたようにニホンミツバチの飼養箱であるハチドウは、幾つかの側面から捉えることが出来る。道具としてのハチドウにはサイズや形状(円筒形か方形か)のように文明化あるいは機能化に対応している部分があり、重石や台座の種類など周辺の文明のあり方に依存した部分もある。一方、巢門の形状や溝の数のように人の意識の外にあっても地域固有の部分があり、所有者を示すシルシのようにその地域の歴史や文化に依拠している部分がある。機能性とは関わらない後者のうち、ハチドウガミの存在は、対馬における長い養蜂の歴史が生み出した人とニホンミツバチとの緊密な相互関係の延長とみることができよう。

ハチがある場所に存続するには、営巣の場所、交尾繁殖の場所、餌や巣の素材の資源を得る場所などが確保される必要があり(Westrich, 1996 など)、一方、人の生存には、生計を維持するに足る食糧や産業(生業)の確保が必要である。人間による自然の攪乱は、野生のハチの生育地を乱し、ある場合にはハチの存在を脅かすことになる。しかし、ミツバチのような訪花昆虫の存在は農作物を含む他殖性植物にとっては種子繁殖の効率に大きく影響する。養



図7 宮崎県西米良村のテッポウ神事の
木の下にあるハチウト

蜂における採蜜という行為は、ニホンミツバチからみると、労働の搾取であるが、一方で人がハチドウを作ることによってニホンミツバチは営巣の場を確保し、また分蜂の手助けや蜜源樹木の植栽という形でニホンミツバチは報酬を得ることになる。対馬では江戸時代中期に猪をせん滅したためにソバを主とする焼畑の面積が急増するが(陶山, 1722)、それは繊維用のワタやアサ、食糧のイネ科穀物をたすけて日々の糧を確保したカブやナタネやダイコンとともに効率の高い生産のために訪花昆虫の増加を必要としたことを意味する。おそらく、ソバの作付けの拡大はハチドウからの採蜜量にもハチのコロニーの数にも飛躍的な増加をもたらしたものと考えられる。蜜の収量とソバの稔りに関係があるとする人は多く、ハチドウをソバ畑の前に備えたり、ハチドウの前にソバを播種する例は頻繁にみられる。対馬では、ニホンミツバチの最初の蜜は10月初めの亥の子の祭に「亥の子餅」として、また「蜜餅」や「だんつけもち」として使われてきたという(月川ら, 1985)。ハチの飼養者がハチとのやりとりの中でハチへの愛着を生んだだけでなく、直接飼養に関わらぬ人々も生活の一部としてハチと関わってきたのである。自然や生活習慣の一部が神となるのは良く知られたことであり(萩原, 1988 など)、ハチドウの神体は、自然物ではない釜やイネと同様の類型(白山, 1992)として神格化したものであろう。このことは日本文化の基層にある豊穡或多産(=女性)信仰へのふつうの出

来事と捉えられよう。その視点からみると舟志の縦穴のハチドウ（図7）は意図としない深層からの作品ともよめる。

ユズの里を売り物に村興しを進めている西米良村では、カメムシ退治の農薬散布によってハチウトにハチが入らなくなったという。この背景には人工林の増大や自然林の減少、農作物の作付け量の減少によってニホンミツバチそのもののコロニー数の減少があり、ニホンミツバチそのものが脆弱な状況にあったものと推定される。そのような状況に比べ対馬でのニホンミツバチの大量な存在は、山や海の神とともにハチドウにみられるような自然信仰の存在がニホンミツバチを含む対馬の自然を保全していると解釈できよう。

人と動物の共生関係は家畜との関係のような文明化の過程（澤田，1986）としても、奈良公園のシカのような単純な友好関係（中尾，1975）としても捉えられる。対馬のニホンミツバチの伝統的飼養をどのような生態学的関係に分類するかより、照葉樹林下の半自然環境における文化の関わり合った生態系の一つととらえ、守り育てていくことが大切のように思える。

謝辞

本研究の遂行に当たって討論と現地調査で協力いただいた金子務先生を初めとする照葉樹林文化研究会の各位、貴重な資料の提供を頂いた対馬峰町の御手洗博之先生、計測に協力いただいた梅本先生および保田謙太郎君、現地調査でお世話になった対馬、西米良、五木の皆様に、また、発表の機会を与えていただいた玉川大学松香光夫先生に深く感謝いたします。（〒599-8531 堺市学園町1-1 大阪府立大農学部）

引用文献

- 千葉徳爾. 1970. 日本山海名産名物図絵. 社会思想社.
萩原秀三郎. 1988. 豊穡の神と家の神目で見える民俗神2. 東京美術.
肥後克子ら. 1991. 聞き書き宮崎の食事. 農山漁村文化協会
久世敦行. 1791. 「古事類苑」動物部14. p. 1119.
小今井収夫・足立勇. 1970. 平凡社世界大百科12. p. 281.

- 宮崎県. 1970. 日向の山村生産用具資料編1. 宮崎県総合博物館. pp. 14-39.
本居宣長. 1793~1801. 日本古典全集玉かつま（與謝野寛ら編, 1926）巻下. pp. 74-76.
中尾佐助. 1975. 朝日新聞（昭和50年5月20日13頁）. 中尾佐助著作集（大阪府立大学総合情報センター所蔵）
岡光夫. 1989. 世界有用植物事典（堀田満編）. 平凡社.
岡田一次. 1997. ニホンミツバチ誌. 玉川大学出版部.
大坪藤代. 1990. ミツバチ科学11（2）: 59-62.
佐々木正己. 1994. 養蜂の科学. サイエンスハウス.
澤田昌人. 1986. 季刊人類学17（2）: 61-125.
白山芳太郎. 1992. 上山春平編日本「神社」総覧. 新人物往来社 pp. 300-301.
杉本和永. 1989. ミツバチ科学10（3）: 121-124.
陶山訥庵. 1700. 猪鹿造詣覚書. 対馬藩.
陶山訥庵. 1722. 老農類語. 対馬藩.
陶山訥庵. 年代不詳. 津嶋記畧乾. 対馬藩.
宅野幸徳. 1994. ミツバチ科学15（2）: 59-68.
月川雅夫ら. 1985. 聞き書き長崎の食事. 農山漁村文化協会.
氏原暉男・俣野敏子. 1978. 農耕の技術1: 43-59.
矢野道子. 1995. 対馬の生活文化史. 源流社.
吉田忠晴. 1990. ミツバチ科学11（2）: 63-66.
Westlich, P. 1996. In The Conservation of Bees (Matheson, A. et al. eds.) Academic Press. pp. 1-16.

HIROFUMI, YAMAGUCHI. A consideration on the traditional beekeeping of Japanese honey-bee (*Apis cerana* Fabricius) in Tsushima Island, Kyushu, Japan. *Honeybee Science* (1998) 19 (3): 129-136. College of Agriculture, Osaka Prefecture University, Sakai, Osaka, 599-8531 Japan.

A firm connection between humanlife and bee keeping was surveyed in Tsushima island. There are variable beekeeping-equipments with similar practices, although most of these show a common feature in size and in the shape of workers' gate. The beekeeping equipment extended as a religious symbol was found in a village of the island. The presence of several conventional customs surrounding the keeping of native bees as the elements of the Shouyou-jurin culture was considered to act as ethnical ethics for nature conservation in the island as well as in the other places with local honeybee keeping in Japan.